分布：全国

オオイヌノフグリ（ゴマノハグサ科）

学名：*Veronica persica*（ヴェロニカ　ペルシカ）

大犬の陰嚢　　別名：天人唐草，瑠璃唐草，ひょうたん草，星の瞳

主な生育場所

田畑の畦から，春耕前の水田，畑地，樹園地，草地，路傍，空き地，庭先，山裾など，里地のいたるところで見られる。陽当たりが良く，やや乾いた場所を好むが，生育適応範囲は広い。

名前の由来：　ハート型の果実の形状が，犬の「陰嚢（ふぐり）」を連想させたため。別名のひょうたん草も同様。天人唐草や瑠璃唐草は，コバルトブルーの花の色から。唐草は帰化種を表した。

特　徴

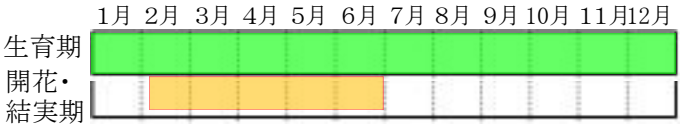
明治初年に渡来したヨーロッパ原産の越年草。茎は細く有毛で，根元から分枝し地を這って拡がる。高さは10～30cmほど。下部の葉は対生だが，茎の上部につく葉は互生する。早春から初夏にかけて葉腋から2～3cmほどの柄を伸ばし，その先にコバルトブルーの径1cmほどの4弁花をつける。一部の花弁が白っぽくなることもある。

＜農業との関係＞

田畑の畦に生育するものは，野辺の彩りとなり作業の邪魔とはならない。また，湛水条件下では発芽せず，また夏期は種子で過ごすため，水田期間中に生育することはない。しかし，ムギ畑や樹園地，畑地内で一面に繁茂すると，地温の低下や水分競合などを引き起こす害草となる。

花弁の一部が白みがかった花とハート型の果実

＜生活史＞　　関東 地方の例(目安)



1年あたり　越年1 世代

＜類似種＞　同じ外来種のタチイヌノフグリの花は，径3mmほどと小さく，茎は直立する。在来種のイヌノフグリは，現在，絶滅危惧種に指定されるほど少なくなっている。その花は，オオイヌノフグリより一回り小さい淡い紅紫色で，果実の膨らみは厚い。

直立し，花の小さいタチイヌノフグリ

＜一言うんちく＞

鮮やかなコバルトブルーの花は早朝から開花しますが，その日の夕方には散ってしまうほど短命です。また，開花してしばらく経つと，軽く花びらに触れたり，風にあおられたりするだけでも，簡単に落ちてしまいます。可憐な花は，実に繊細にできているようです。

＜人との関わり合い＞

その名前を知らなくても，早春の野辺を彩るこのコバルトブルーの花に見覚えのある人は多い。オオイヌノフグリは日本に入ってきてからわずか150年ほどの間に全国各地に拡がり，今やシロツメクサなどと並んですっかり，日本の里地植生になじんでしまった。しかし，文化的には，まだまだ付き合いが浅いようで，食用や薬用などの記録はほとんどない。

＜俳句や短歌への登場＞

【春】いぬふぐり空を仰げば雲もなし（高浜虚子）

※当時すでに，オオイヌノフグリは各地に広まりつつあったが，この句のなかの「イヌノフグリ」が本種オオイヌノフグリを示しているのか，在来のイヌノフグリを示しているのかは定かではない。